

～歩くひと、自転車や電車・バスに乗る人、本を読む人を応援します！～

交通・環境・まちづくり おすすめ図書

2010

■ 目次

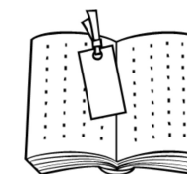
【はじめに】	1
「都市縮小」の時代	2
足田智の自転車生活スターティングBOOK	3
自転車の安全鉄則	3
東京・自転車抜け道ガイド	4
モビリティ・マネジメント入門	5
おばあちゃんにやさしいデマンド交通システム	6
子どもが道草できるまちづくり	7
一通学路の交通問題を考える	
脱ファスト風土宣言 商店街を救え！	9
日本型まちづくりへの転換	10
ミニ戸建て・細街路の復権	
道路整備事業の大罪—道路は地方を救えない	11
クルマを捨てて歩く！	12
Divorce Your Car!	13
- Ending the Love Affair with the Automobile (洋書)	
【交通・環境・まちづくり 図書目録】	15

◇

◇

■ 各ページは下記の会員が担当しました：

2,7～9,12～14	堀 添
5,6	高 橋
3,4,10,11	井 坂
企画・校正協力	野 口



地域交通出前講座シリーズは、毎日の生活に欠かせない身近な地域交通に関する最新情報や専門家の講演などに気軽に接していただけるようお届けし、人と環境にやさしい地域交通に関する情報収集の一助になるよう企画・頒布しています。

■ はじめに

人と環境にやさしい交通手段がより便利で快適になるよう取り組む私たち。新刊ラッシュに埋もれた良書に光を当て、本と出会うきっかけをつくりたいと思い、昨年度は『交通・環境・まちづくり おすすめ図書』の初版を発行しました。その企画段階では手探りで始めましたが、当会会員が専門知識がなくても読みやすい本を中心に厳選してご紹介。実際に配布を始めてみると予想以上に好評をいただき、1年かけて配る予定がわずか4ヶ月で配り終えてしまいました。

私たちが取り組む地域交通分野は、毎日の生活に欠かせない大切なものですが、その割りに情報が少なく、私たちのような市民活動も例が少ないようです。一方で、最近が高齢化や健康・環境問題などを受けて、コミュニティバスや自転車が注目されています。環境問題や都市景観に関心の高い欧州の都市ではすでにクルマ依存からの脱却をすすめており、今では公共空間やコミュニティづくりなどの地域に根差した安全・快適なまちづくりに注目が集まっているようです。

こうした状況を受けて、9冊ご紹介した昨年度版にさらに3冊を加え、計12冊をご紹介する本冊子を企画しました。昨年度は「かわさき市民公益活動助成金」の助成をいただき、市内の一部図書館や市民活動センターなどの公共施設でも配布にご協力いただきました。さらに初版発行後に寄付金やご声援をお寄せいただくとともに、書評や製本作業をご担当いただいた会員の皆さんのおかげで、新たに本冊子を発行できました。この場を借りて御礼申し上げます。

巻末には図書目録を収録し、書店で使われるISBNと、図書館での蔵書状況をご確認いただけます。また、当会で所蔵している本は予めご連絡いただければ、当会定例会やイベント出展時などにご覧いただけるようご用意しています。

私たちや子どもたちのために、人と環境にやさしい交通・まちづくりが求められている昨今、私たちに出来ることは意外と多い。本冊子が、地域をより良くするための取り組みを考える一助になれば幸いです。

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

代表 井坂 洋士



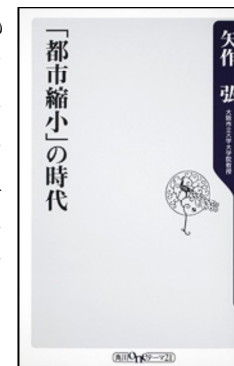
「都市縮小」の時代

今、世界各地の都市で、人口減少と街の空洞化など「都市縮小」現象が起きているという。それにともない、治安の悪化、税収の悪化と行政サービスの削減、ひいては地域社会の崩壊など、看過できない問題が生じている。アメリカのある都市では、主要産業の衰えにより、40年で人口が17万人から8万人に減少した。街の中心部には空き家や廃ビルが目立ち、「時々空き家で死体が見つかるが、問題にもされない」という荒涼たる風景が広がる。本書は、このような危機的状況に対し、街の再生を果たそうと奮闘する各国各地域の取り組みを紹介する。その際、著者が提唱するのは、「発展や拡大」ではなく、「縮小を生かす」という方向だ。

国の財政状況の厳しさが喧伝されて久しい。無駄を削るのも大切だが、新たな産業を興すなどもっと元気の出る解決策を考えたいのではないのか。そう思い込んできた自分にとって、本書の「賢く衰退する」というキーワードはまさに驚きだった。しかし、本書の言う「衰退」は、決して諦めの態度ではない。逆に、主体性や創意工夫をより必要とする積極的な姿勢だ。例として取り上げられているデトロイトを見てみよう。自動車都市として脚光を浴びたこの街は、その自動車自体によって「分断都市」に陥った。自動車優先で公共交通機関が失われ、富裕層が住む郊外と、貧困層の住む地域が隔絶されている。後者には放棄された宅地や工場跡地が4万区画にも上るといふ。

市当局がカジノ等の建設で再興をはかろうとしたところ、自動車会社の組合活動家や地域住民の運動により、そうした放棄地を農地として再利用する試みが行われている。目指されているのは、地域循環型の経済社会だ。消費するだけのクルマ生産偏重から、自分たちの手で働く場を生み出し、環境を守り、地域の絆を取り戻していく。莫大な利益とは無縁であるが、人間らしい生活がそこにはある。

果たしてこれから食べていけるのだろうか。多くの国民が不安を抱える中、本書の示す方向性は大きな希望をもたらす。同時に「都市縮小」の原因の解明も忘れてはならないだろう。例えば人口減少の原因として、勤労世帯の労働条件の劣悪化、保育園不足など子育て環境の不備といった、それ自体解決しなければならない問題も多い。自国の産業政策や企業の活動が、他国の国民に与えている影響も見逃せない。「都市縮小」現象を知ることをきっかけに、改めてそうした問題についても考えていきたい。



矢作弘／角川oneテーマ21新書

2009年、ISBN 978-4-04-710218-7

足田智の自転車生活スターティングBOOK

足田智／ロコモーションパブリッシング 自転車生活ブックス4
2006年、ISBN 4-86212-035-0

今、環境にやさしく健康的で便利な自転車が人気だそうです。自動車は売れなくても自転車は売れていると聞きます。買い物や駅までの足としてはもちろん、職場まで自転車で行く人も増え、「ジテツウ」という言葉も聞くようになりました。定番のマチャリとは違う、走れる自転車に乗りたいという人が増えているようです。そんな人たちの強力な味方になりそうな本が、『足田智の自転車生活スターティングBOOK』。

自転車通勤を始めて人生が変わったという著者は、自転車を「使い」始めて若返った、そして東京がワタシのものになったと言います。たとえば、本文p29に自転車「使用前」「使用后」の比較写真が載っていますが、体重 84kg→68kgの圧倒的なダイエットを実現したのだとか。

でも、毎日乗る自転車だから、雨が降ったときは？ 手入れは？ 疲れにくい乗り方は？ いろいろ気になります。本書には、毎日自転車通勤をされている著者の経験から、自転車生活を楽しむためのいろんなコツが盛り込まれています。ちょっと本格的に自転車に乗ってみようと思ったとき、本書が手助けになってくれそうです。



自転車の安全鉄則

もうひとつ、自転車で気になるのは安全な走り方。自転車は車道？ 歩道？ いつも当たり前のように走っているけれど、実はどこを走ったらいいかわからない……そんな人も少なくないかもしれません。歩道を走る人が多く、左右も構わず走ってしまいがちな自転車ですが、著者は自転車事故が増加していることを心配しており、事故の傾向を分析するとともに自転車活用先進国のオランダ、ドイツ、デンマークなどの事例も交えつつ、「自転車は左」という「安全鉄則」を徹底することから始めること、自転車は「左側通行さえ守れば、年間約400人の命を救える」ことを訴えます。

毎日乗る自転車だからこそ、安全に、安心して乗りたいもの。すでに自転車に乗っている人にはもちろん、正しく使えば健康に、環境に、そしておサイフにもうれしい良いことづくめの自転車利用をこれから始めてみようかと思った人にも、この2冊は頼もしい参考書になってくれそうです。

足田智／朝日新書147
2008年、ISBN 978-4-02-273247-7

東京・自転車抜け道ガイド 幹線道路は危険がいっぱい

今、自転車が売れている。スーパーでは他の商品が売れない中でも自転車は売れている(チェーンストア協会調べ)らしいが、いわゆるママチャリだけではなく、最近ではロードバイクやクロスバイクといった、もう少し遠くの目的地へ速く行くための交通手段としての自転車も選ばれるようになってきたようだ。略して「ジテツウ」と呼ばれる自転車通勤が増えているようで、実際に朝の通勤時間帯には颯爽と自転車で駈ける姿を見る機会が増えた。

自転車は車道を走るものだが、幹線道路は相変わらずクルマ優先の構造になっており、自転車で走るには危険が多い。健康のために自転車に乗りだめたつもりが、排気ガスを吸わされてはかえって健康にも悪そう。そして何より、毎日命懸けで走るのは辛いわかりで楽しくない。道路管理者である行政には猛省と改善を求めつつも、今のところは安全・快適な道を選んで走る必要もありそう。

本書では、国道246号(二子橋→渋谷駅方面)、国道1号(多摩川大橋→五反田駅方面)、国道15号(六郷橋→品川駅方面)に沿った道が案内されているので、川崎市に住んで東京方面へ通勤する人には参考になりそう。通勤でなくとも、知らないまちへ足を延ばしてみるのも良いだろう。書店の自転車関連の売場を見れば、他にも本書のような自転車ガイドブックが多く並んでいるし、もちろん自分で走りながら道を見つけてみるのも醍醐味だ。

とはいえ、本書で案内されている道はいわゆる生活道路で、第一に地域に住まう人が毎日の生活の中で歩き、交流する場所だ。自動車が住宅街へ侵入する「抜け道」利用が問題視されているが、自転車がその二の舞にならないよう、まずは道を共有する人みなが安全・快適になるような走り方を心がけたい。本書を眺めるだけでも、知らないまちへ一歩踏み出すきっかけを得られるのでは。

ロコモーションパブリッシング
2008年、ISBN 978-4-86212-063-2



モビリティ・マネジメント入門

「人と社会」を中心に据えた新しい交通戦略

我が国の二酸化炭素（CO₂）排出量のうち運輸部門は19.1%、その内自家用乗用車の割合は48.2%（2007年度統計）だ。CO₂削減にはクルマの利用を減らすことが欠かせない。ではどうクルマ社会を抑制していくか？

「クルマ利用をできるだけ控えたり、公共交通をできるだけ使うような“意識”を、行政の施策を通じて醸成していくなど、本当できるのだろうか」という疑問に答えるのが、本書だ。

『モビリティ・マネジメントとは、当該の地域や都市を、「過度に自動車に頼る状態」から「公共交通や徒歩などを含めた多様な交通手段を適度に（＝かしこ）利用する状態」へ少しずつ変えていく』一連の取組を意味するもの。

「特にオーストラリアや英国では、日本より一足早く、数万世帯、数十万世帯を対象とした大規模なコミュニケーション施策が展開され、大きな成果が上げられている」。

西オーストラリア州政府は2000年から10年間で64万人を対象とする計画を実施。総経費は約30億円。これは「4車線の道路をわずか7km整備する費用に等しい」。この1ドルの投資によって、ガソリン、CO₂、旅行時間の削減という社会的便宜が約13ドル得られるという。

ロンドン交通局では06年に20年計画をまとめ、25年までに4割の公共交通容量を増強し、9%の自動車分担率を削減する数値目標を掲げた。その社会的便宜の試算額は約40兆円。ロンドンの温室効果ガス削減目標値30%に対して、この施策によって、その22%削減が可能と想定されている。

西オーストラリア州パースではこの施策に約20名のスタッフを配置した。まずハガキを郵送。電話によるアンケートを実施して、自転車で個別訪問して「公共交通のお試しチケット」など個人に合った情報グッズを手渡す。その結果、南パース市では自動車に依存した45%、6,000世帯が興味ありと分類された。本書ではこんな内外の実例を紹介している。

『モビリティ・マネジメントにおいて目指すべき社会は、「クルマが無い社会」ではなく、「かしこクルマとつきあう社会」なのだ、という点を忘れてはならない』

藤井聡・谷口綾子／学芸出版社
2008年、ISBN 978-4-7615-2426-5

おばあちゃんにやさしい デマンド交通システム

『こうした仕組みをなぜ創り出せたのか。答えは簡単で、門外漢だから、交通事業者やシステム事業者の「できない理由」に耳を傾けないで、利用者である高齢者を中心とする需要サイドから最適な移動サービスは何かを純粋に追求できたからだと思っています』と著者が本書の中で語っている。

この新しい交通システムはすでに13県34の旧市町村（現、自治体数で32）地域で導入され、「全国デマンド交通システム導入機関連絡協議会」（※）が結成された。

※ <http://www.demand-kyougikai.jp/>

これはITを活用した乗合タクシーで、従来のバスとタクシーの利点を兼ね備えた公共交通サービスだ。電話予約（デマンド）で、登録すれば誰でもが移動できるという交通機関。発祥の地、福島県 旧小高町では、『安くて便利で楽しく生きがい運ぶ宝船』となった。街中の移動では100円で戸口から戸口へと送迎してくれる。郊外の自宅から街中へは1回300円。「今では一部地域の園児と小学校低学年の送迎を含めて1日平均120人以上、年間3万人程度が利用する地域にとって欠かせない交通システムになっている」という。本書では豊富な図解や表で具体的な収支状況も含め、成功までたどり着いた経緯を詳細に紹介している。

自家用車の台数が世帯数どころか住民人口を上回る地域も存在する今日、『ほとんどの住民が路線バス等を利用していない現状をデータで示した上で、真に公共交通を必要としている、いわゆる「交通弱者」にとって「望まれる交通とはどのような移動サービスなのか」を問いかけることからスタートすることになっています』と著者は訴える。

このシステムは、住民・行政・事業所の「三方一両得」が成立する、商工会議所、地域商店街、既存のタクシー会社を巻き込む市民運動にも似た取組だ。すでに人口10万人規模の地方都市でも導入されている。本書はコミュニティバス導入を模索する地域の人びとに「少子高齢社会における地域活性化に取組む上での実践的なケーススタディとして」格好な教科書となろう。

奥山修司／NTT出版
2007年、ISBN 978-4-7571-2202-4



子どもが道草できるまちづくり

通学路の交通問題を考える

「日本の子どもたち」について考えるとき、私はよくこう思います。「大切にされ過ぎ、同時に大切にされていない」。

昨年、甥を「アンパンマン・ミュージアム」というテーマパークに連れて行きました。キャラクターのジオラマや乗り物、ブロックや積木で遊ぶスペース、レストランではアンパンマンのホットケーキ、色とりどりのお土産用キャラクターグッズ。楽しそうな子どもたちでかなり賑やかです。でもそこでは子ども同士が遊ぶのではありません。付き添いの大人が見守ったり、相手をしたりしながら、単独で設備を使って遊ぶのです。極端な場合、三人ぐらいの大人が一人の子どもを取り囲んで、遊ばせています。個人のレベルでは過剰ともいえるほど、日本の子どもは「大切に」されている象徴のような場所でした。

一方、昔、子どもの学童保育のことで相談に行った「子ども文化センター」の老朽ぶりや、学童で常備薬を買う余裕がないので、親たちがお金を出し合うという話にとても驚いた記憶があります。それでも学童保育に通えただけでも幸せなことで、周知のとおり、目下、保育園も学童保育（現在はわくわくプラザ）も、質量ともに十分とは言えません。日本のこどもは、集団のレベルではあまり大切にされてこなかったのではないかと。教育機関に対する国の予算支出のGDP比がOECD加盟国28カ国中28位（1位アイスランド7%、日本3.1%）と最下位であることも、近年話題になりました。

今まで日本では、子育ては各家庭の責任という一面の正論を隠れ蓑に、社会の責任は放棄され、大人たちもパラパラにされてきたのではないのでしょうか。しかし家庭だけで背負うには、子育ては荷が重過ぎ、またわが子さえ困らなければいいという考えでは、そのわが子でさえ幸せになれないことに、多くの人が気づきつつあるように思います。例えば、保育園や学童保育など集団保育も、いずれ「親が働いているからしかたなく子どもを預けるところ」ではなく、「子どもの成長にとっ



て必要だから通う重要な場所の一つ」として認められるようになるだろうと確信しています。同年齢や異年齢の仲間と生活し、群れて遊ぶことこそ、子どもたちの豊かな成長を促すと思うからです。さらに保護者も、一対一で密着してわが子を育てるのではなく、保育園等に子育てを丸投げするのではなく、わが子を含めた子どもの集団を、保育職員や他の保護者と協力して支える。そのように協働して子どもを育てることが、住みやすい社会につながるのではないかと思います。

本書『子どもが道草できるまちづくり』も、地域の身近な道を子どもたちの手に取り戻すことを通して、社会全体で子どもの成長を支えることを提起するものです。そこでは、保育園や学童保育に関する発想の転換同様、道や「道草」が子どもの成長にとっていかに重要な役割を持つものであるか、それを最も阻んでいるものがクルマであることを、様々な角度から明らかにしています。「遊び場」というと、真っ先に公園を増やそうとか、「通学路で重要な課題は」というと安全対策とか、私自身も「道はクルマがまず使うもの」という先入観に縛られていたことに気づかされました。子どもにとっては、大人の介入を受けないで、自由に遊びの拠点を移動できることがどれだけ大事か。いわば地域全体が遊び場であり、生活の場であってこそ、成長に必要な営みが可能となることを、本書は示しています。家庭、保育園、学校、学童保育等、子どもを育てる場を孤立させ、子どもを囲い込むのではなく、その周囲に地域という子育ての場を拡げるには、まず物理的に道を人が優先される場にしなければなりません。それはまさに社会全体で取り組まなければ実現できません。逆に、そのような苦勞を共にすること自体、社会の絆を再生する過程でもあります。本書の執筆陣は、子どもをその過程における単なる客体とはとらえていません。子どもは共に社会を変える仲間という想いが伝わってきます。問題発見・解決には、そうしたまなざしと想像力が不可欠であることも、本書は訴えているのではないかと思います。



仙田満 + 上岡直見・編／学芸出版社
2009年、ISBN 978-4-7615-2463-0

脱ファスト風土宣言 商店街を救え！

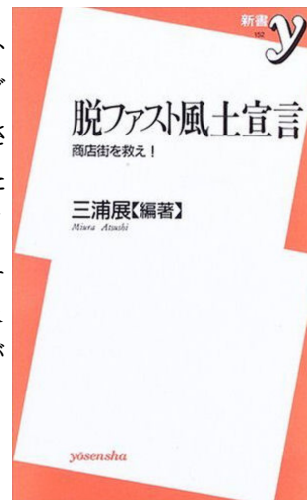
警察庁の統計によると、殺人事件
の認知件数は1997(平成元)年から

2006(平成18)年まで、1300～1400件の間を横ばいで推移しているものの、
同じ凶悪犯罪の一つ、強盗事件は97年から03年まで著しく増加し(2809件
から7295件)、その後減少に転じています。「実際に犯罪は増加しているか」と
いう点では、多様な議論があるようですが、痛ましい事件が大きく報道されることも
あり、治安が悪化したと感じる人も多くなっているように思います。

本書は、犯罪を増加傾向にとらえ、その一因として、
日本の地方の「ファスト風土化」を挙げています。「ファスト
風土化」とは、主に車偏重と無軌道な大型ショッピング
センター出店により、地方の固有の文化や自然が壊さ
れ、まるでファストフードのように全国が均一になってしまった
状況を指します。ファスト風土化で、街の中心だった商店
街はさびれ、人々が交流し、生き生きと活動するコミュニ
ティが台無しになっている。その結果、地方から雇用が失
われ、住民同士の無関心さから犯罪が増え、子どもが
遊び、育つ場が減っているのではないかというのです。

本書は、環境デザイン、都市計画、マーケティングなど、
様々な分野の専門家が、ファスト風土化を食い止め、
商店街や地域コミュニティ再建の方策を提案するものです。そこでは「多様さ」
「コンパクトさ」「歩行性」という点が一つの要になっています。海外の例も興味
深いですが、江戸の街の先進性や、下北沢や吉祥寺といった「人に好かれる
街」の特徴など、日本の街が持つ魅力や、優れた点を再認識させてくれ、「日
本にも生かすべきいいところがたくさんある」と力がわいてきます。ファスト風土化防
止のためには、行政や業者からのお仕着せではなく、住民自ら地域設計・運
営にかかわることの重要性や、そのためにも地方が強い自治権をもつべきことも
提言されています。現在、道州制など地方自治の問題が盛んに論議されつ
つありますが、それとの関連でも興味深い一冊ではないでしょうか。

三浦展・編著／洋泉社新書Y
2006年、ISBN 4-86248-020-9



日本型まちづくりへの転換 ミニ戸建て・細街路の復権

21世紀に入った私たちは、様々な課題に直面しています。特に20世紀には
当たり前と考えられていたもの、たとえば「高度経済成長」やそれに伴う土地神
話、終身雇用、ベビーブームなどの終焉などが挙げられるでしょうか。また、気候
変動(地球温暖化)をはじめとする環境問題がますます深刻化しています。

本書ではまず、こうした変化を分析し、私たち都市生活者の意識が、これまで
の「豊かになれない不満」から、明日どうなるか分から
ないという不安へ変わってきたと指摘しています。しかし、
公共投資の高規格志向や、人口減少社会にもか
かわらず不動産開発を拡大させるなど、社会の仕組
みは私たちの変化に対応できていないようです。

著者はこのような問題を指摘した上で、その解として、
量から質への転換、具体的にはこれまで「理想」と思
い込んでいたマイホーム(住宅)とマイカー(交通)の再
定義を提案しています。

著者は今までも『なぜ日本の街はちぐはぐなのか』
『日本型魅惑都市をつくる』などの著書がありますが、一貫して指摘されている
のは、まちづくりの主役は家計や企業であって公的部門ではないという点。さらに
本書では、本来の日本の都市が持っていた細街路や小規模宅地を評価し
つつ、「コンパクト」な敷地・建物を活かした街をつくることが提唱されています。

私たちは、とく「まちづくり」と言う役割所の仕事かと思ってしまう節がありますが、
実際には私たちにできることがたくさんありそうです。本書では具体例として緑化や
防災などを「都市生活者自らが担う」べきとしていますし、巻末では「一人から始
められるまちづくり」を例示しつつ、私たちに「日本型まちづくり」への参画を求めて
います。私たちが意識を改めて参加意識を持つことが、住みよい「まちづくり」への
第一歩になるのかもしれません。



青木仁／学芸出版社

2007年、ISBN 978-4-7615-2408-1

道路整備事業の大罪

道路は地方を救えない

服部圭郎／洋泉社新書 y

2009年、ISBN 978-4-86248-436-9

昨今、道路整備がよく話題にのぼります。道路財源の問題が出ると必ずと言っていいほど「道路は必要」という話が聞かれます。「必要」と言うのは簡単ですが、その中身はあまり意識されない。これを裏返すと、私たちはさして根拠もないのに何となく「道路を造るのは良いことだ」と思い込んでいるのかもしれない。



都市・地方計画を専門にする著者は、道路統計などを分析しながら、諸外国との比較において日本は極めて道路密度が高くなっている事実を指摘。さらに、道路を造ったら寂れた町や、日用品の買物にも困る人の増加、公共交通の廃止、渋滞の悪化した事例などを紹介しながら、私たちの目から鱗を落としてくれます。今時は「道路整備で温暖化対策」などというビックリするような理由まで挙がるようですが、そのように様々な理由をつけて造られてきた道路をよく見てみると、実はその「効果」があまり根拠の無いものだったことが、3～4章で詳しく解説されています。

一方で、道路にあえて制約を加えたからこそ安全・安心・快適さを手に入れることのできた様々な事例が、5～6章で紹介されています。たとえば、クルマの速度を落とさせる工夫をして歩行者優先のまちづくりをしたら賑わった商店街、道路の拡幅をあえて行わずに観光客を増やした山間部の農村、再開発をせずクルマが入れないからこそ賑わっている下町の駅前商店街など、これまでの私たちの「常識」とはまるで逆の実例がたくさんあることを思い知らされます。どうしても道路を「造った」という話題の方が目立ちますが、逆に「造らなかった」事例を丁寧に探してみると、私たちのすぐ近くにもこうした事例が見つかるかもしれませんね。

著者は「道路に依存しないことが再生のチャンス」だと認識しています。これは今までとは逆転の発想ではないでしょうか。これまでの道路依存、クルマ依存の経済・社会が立ち行かなくなっている今だからこそ、道路がもたらす弊害を見つめ直すことで、新たなチャンスを見つけ出せそうです。

クルマを捨てて歩く！

杉田聡／講談社+α新書

2001年、ISBN 4-06-272085-X



北海道で車なしで30年。子どもの保育園へも、“ママコート”を着て歩いて通った著者が、車なしの快適生活を紹介します。その快適さは、時間、お金、健康、人間関係と多岐にわたります。

中でも注目したいのは、安全面です。著者によると、時速60キロの車にぶつかったら、その衝撃は深さ14メートルの穴（5階建てビルくらいでしょうか？）に落ちた時と同じだそうです。

このような「動く落とし穴」のそばを、子どもや老年寄りが毎日歩いているのは、確かに本当に怖いことです。いろいろな事情で必要な車も確かにあります。でも、子どもたちをこのような危険にさらしてまで、車で移動しなくてもいい、という場合もあるかもしれません。多くの人が、車に乗る前に、「この用事を済ませるには、車でなくては無理かな？」と一呼吸考えて、徒歩や自転車でもよかったらそれらを選択する、といった行動をとることで、痛ましい交通事故を少しでも減らせることでしょう。2007年度でも交通事故で亡くなった方は5744人もいらっやいます。

次に興味深かったのは、時間の側面です。車を使うと、時間が節約できると思いますが、著者はそこにも疑問を呈し、興味深い計算をしています。

○サラリーマンの平均年収は465万円(1995)
○平均実働時間9.5時間

車関係の維持費を年間60万円とすると、年収の13パーセント、1日当たり1.24時間を車の支払いに当てていることになります。

さらに、車の年間平均走行距離は約9000キロで、仮に時速40キロで走ると、年間225時間車に乗っていることになり、先ほどの車の維持にかかる時間316時間（1.24時間×実労働日数255日）を加えると、541時間になります。9000キロ移動するのに、541時間かけるとすると、車の平均時速は16.6キロにしかならないということです。

これは平均値での計算ですが、個々人が自分の条件で計算してみても面白そうです。

本書では、車使用を控えてみるメリット以外に、歩道や交差点の改善等、地域で取り組める安全対策についても提言がなされています。何より、歩くことは楽しい上に、一人でも気軽にできる運動、安全・環境対策になるという発想の転換が素敵です。車では単なる「移動」になってしまう道程が、歩けば、発見のある豊かな過程になるという考え方は、人生の過ごし方にも重なるような気がします。



本書は残念ながら重版予定無し（実質絶版）となっています。図書館でご覧いただくか、古書店で探してみてください。

なお川崎市立図書館でも蔵書しています。

（中原、橘、宮前、多摩。他館でも取り寄せ可）

Divorce Your Car!

Katie Alvord

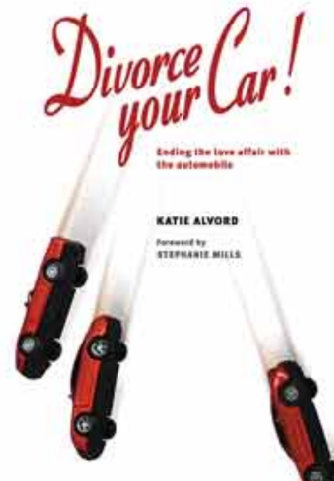
Ending the Love Affair with the Automobile

本書は、クルマ依存から脱却し、自分の人生をもっと豊かにしようとの想いで、「クルマの問題点についての事実」と「脱却の方法」について総合的に書かれた著作です。数々のデータや研究をもとにしていて、学術面でもしっかりした内容であるにもかかわらず、原題の『クルマと離婚しよう!』という、ちょっとドキッとするタイトルからもうかがえるように、ユーモアあふれる著作でもあります。

著者のカナダ人キャシー・アルボードさんは、ある環境セミナーに参加したことをきっかけに、クルマ依存社会の問題点に気づき、クルマ問題について学び始めるとともに、自らもクルマなしの生活にトライしてみることにしました。その結果、多くのメリットも享受するのですが、同時に多くのデメリットも実感します。なぜなら長期にわたり、世界はクルマ前提の社会に造りかえられ、クルマなしで生活する人をどんどん不利にしてしまったからです。

クルマに過度に依存しないようにすることで、健康の改善やお金の節約等、個人的に得るものは想像以上に多くあります。それ以上に、クルマ依存社会からの脱却は、自然環境保護や共同体の再生、住環境の改善、エネルギーの有効利用など、今日人類規模で問題となっている諸問題解決に役立つことを著者は力説しています。逆から見ればそれらの諸問題は、クルマを稼ぎ頭として巨大な利益をあげてきた大企業、それを助ける政府の極端にクルマ偏重の産業政策がもたらしたものであり、著者は具体例もあげて、それらを批判しています。

これまで当たり前と思っていた風景が、全く違ったものだったと気づく場合はそれほど多くはありませんが、クルマ依存社会はまさにそんな一つです。例えば「なぜGMという自動車メーカーが、クレジット会社も経営しているのだろう」と以前から



不思議でしたが、高額のコルマをクレジットで買わせるために、クレジットを扱う会社が必要だからということを書で知り、納得しました。クルマを生産し、販売するだけでなく、資金の用意までしてくれる。もちろん、資金の貸付でも多額の利益を得ることができる。なんと完成された形態の商売だろうと感心してしまいます。でも、今日の金融危機や多重債務問題の深刻化を目にするにつけ、感心している場合ではありません。これ以外にも、私たちが自覚している以上に、社会そのものがクルマ存在を基盤に成り立たされている事例が、数多く紹介されています。

また、クルマが排出する汚染物質についての解説には、目に見えない微粒汚染物質を吸い込み、それが血流を通じて脳に到達して蓄積していく様子など、文字通り背筋が凍る思いになります。地震や台風といった大規模災害と異なり、これらはあまり目立たず、しかも長期にわたりじわじわと人々を蝕んでいきます。それは自殺まで招くモラルハラスメントやパワーハラスメントなどの精神的虐待にも似て、極めて不気味です。交通事故死の問題と合わせ、直接の生命被害の問題は、クルマ依存からの早急な脱却の必要性を私たちに訴えます。

一方で、クルマのない生活には、どこか懐かしい民話の世界のような情景が浮かびます。

ある大雪の日、クルマが使えなくなり外出できなくなってしまった住民たちが、特に目的はなく通りに出てきておしゃべりを始めます。日頃は効率優先であいさつ程度のつきあいですが、この日は遊ぶ子どもたちを傍らに、大人たちは大雪に囲まれながら話に興じ、お互いの気持ちが近づきます。雪が溶けてしまった翌日、その光景は幻のように消え、またイライラした慌ただしい毎日が始まるのです。幻のような世界のほうが、なんだか人の本性にあっていような、誰もが心では、そんなゆったりした生活ならいいなど感じている風景を、筆者は切り取って示してくれます。

筆者が提示する事実や問題、提起する解決策については、それぞれ個別に詳細な書籍が他にも出版されています。専門的にはそれらを当たるとして、総合的歴史的にクルマ問題を見渡し、具体的なクルマ依存社会からの脱却方法を考えるうえで、大変有益な著作ではないかと思ひます。それほど難解な表現で書かれていないので、英語の勉強の素材として読んでみるのもいいかもしれません。

New Society Publishers

カナダ、2000年、英語

交通・環境・まちづくり図書目録

——本冊子の作成にあたり参照した本をご紹介します。

	書名／著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	図書館 蔵書数
	歩行・生活環境			
	都市と交通 岡並木	岩波新書 黄155	1981 ×	市2 県2
⑫	クルマを捨てて歩け！ 杉田 聡	講談社 +α新書 4-06-272085-X	2001.8 ×	市4
	オープンスペースを魅力的にする—親しまれる公共空間のためのハンドブック— / 服部主郎	学芸出版社 4-7615-1207-5	2005.11	市1
	路地からのまちづくり 西村幸夫	学芸出版社 4-7615-3147-9	2006.12	市1 県立
	買物難民—もうひとつの高齢者問題 杉田聡	大月書店 978-4-272-36062-8	2008.9	県立
⑦	子どもが道草できるまちづくり—通学路の交通問題を考える 仙田満・上岡直見 編	学芸出版社 978-4-7615-2463-0	2009.7	市1 県立
	都市の自由空間—街路から広がるまちづくり 鳴海邦碩	学芸出版社 978-4-7615-2471-5	2009.10	
	自転車			
	自転車市民権宣言—「都市交通」の新たなステージへ 石田久雄・古倉宗治・小林成基	リサイクル文化社 4-434-05607-7	2005.2	市1 県川
③	足田智の自転車生活スターティングBOOK—とりあえずワタシはこえて走り出した— / 足田智	ロコモーションパブリッシング 4-86212-035-0	2006.2	市2
	自転車利用促進のためのノット施策—欧米先進諸国に学ぶ環境・健康の街づくり— / 古倉宗治	ぎょうせい 4-324-08007-0	2006.12	市1 県立
	ベグリスト宣言!—40歳からの自転車快楽主義 斎藤純	NHK出版 生活人新書 978-4-14-088240-5	2007.12	市2
④	東京・自転車抜け道ガイド—幹線道路は危険がいっぱい 自転車生活ブックス編集部・編	ロコモーションパブリッシング 978-4-86212-063-2	2008.3	市1
③	自転車の安全鉄則 足田智	朝日新書147 978-4-02-273247-7	2008.11	市3 県立
	自転車をめぐる誘惑 足田智・ドロンジョース恩田	東京書籍 978-4-487-80328-6	2009.4	市3
	自転車会議!—なぜ、各界のトップランナーは自転車を選ぶのか— / 足田智・他	PHP研究所 978-4-569-77217-2	2009.9	市2
	ものさし自転車の悦楽 折りたたみ自転車で始める新しい日々 足田智	マガジンハウス 978-4-8387-2094-1	2010.4	市6
	コミュニティサイクル—公共交通を補完する新自転車システム 都市型コミュニティサイクル研究会	化学工業日報社 978-4-87326-569-8	2010.6	市1

書名／著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	図書館 蔵書数
公共交通(鉄道、軌道、バスなど)			
路面電車ルネッサンス 宇都宮淳人	新潮新書034 4-10-610034-7	2003.9	市5 県2
ムーバスの思想 武蔵野市の実践 土屋正忠	東洋経済新報社 4-492-22252-9	2004.8	市1
定刻発車—日本の鉄道はなぜ世界で最も正確なのか? 三戸祐子	新潮文庫み35-1 4-10-118341-4	2005.5	市4 県2
新・鉄道は地球を救う 上岡直見	交通新聞社 978-4-330-91007-9	2007.2	市1 県川
⑥ おばあちゃんにやさしいデマンド交通システム 奥山修司	NTT出版 978-4-7571-2202-4	2007.9	市2
満員電車がなくなる日—鉄道イノベーションが日本を救う 阿部等	角川SSC新書029 978-4-8275-5029-0	2008.2	市1 県川
生活交通再生—住みつつけるための“元気な足”を確保する 土居靖範	自治体研究社 978-4-88037-522-9	2008.11	県川
生活支援の地域公共交通 秋山哲男・吉田樹 編著、猪井博登・竹内龍介 著	学芸出版社 978-4-7615-2455-5	2009.4	市1 県川
可愛い子には鉄道の旅を—6歳からのおとな講座 村山茂	交通新聞社新書001 978-4-330-07209-8	2009.6	市1
成功するコミュニティバス—みんなで創り、守り、育てる地域公共交通 / 中部地域公共交通研究会 編著	学芸出版社 978-4-7615-1264-4	2009.11	
バスマップの底力 —作ろう・使おう・育てよう!— 全国バスマップサミット実行委員会 編著	クラッセ 978-4-902841-06-0	2010.8	市1
自動車・道路問題、交通政策			
マイカー亡国論 湯川利和	三一書房	1968 ×	県2
自動車の社会的費用 宇沢弘文	岩波新書 青890 4-00-411047-5	1974	市5 県2
クルマ社会アメリカの模索 西村弘	白桃書房 4-561-71120-1	1998.7	県立
交通権憲章—21世紀の豊かな交通への提言— 交通権学会 編	日本経済評論社 4-8188-1077-0	1999.7	市1 県川
クルマと道路の経済学 柴田徳衛・中西啓之	大月書店 4-272-14039-6	1999.9	市1 県立
地球はクルマに耐えられるか—消費のハイウェイから人間の道へ— / 上岡直見	北斗出版 4-89474-015-X	2000.10	市1 県川
世界は脱クルマ社会へ—逆行する日本 白石忠夫	緑風出版 4-8461-0014-6	2000.11	市1 県川
自動車にべらかかっているか 上岡直見	コモンズ 4-906640-52-4	2002.5	市1 県川
道路行政失敗の本質〈官僚不作為〉は何をもたらしたか 杉田聡	平凡社新書202 4-582-85202-5	2003.11	市1

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×＝絶版	図書館 蔵書数
自動車・道路問題、交通政策 つづき			
市民のための道路学 上岡直見	緑風出版 4-8461-0409-5	2004.7	市1 県川
交通政策の未来戦略―まちづくりと交通権保障とで脱「クルマ社会」の実現を― / 土居靖範	文理閣 978-4-89259-536-3	2007.1	市1 県川
脱クルマ社会の交通政策―移動の自由から交通の自由へ 西村弘	ミネルヴァ書房 978-4-623-04852-6	2007.4	市1 県立
公共事業と市民参加 東京外郭環状道路のPIを検証する 江崎美枝子・喜多見ボンボコ会議	学芸出版社 978-4-7615-2406-7	2007.6	県立
脱・道路の時代 上岡直見	コモンズ 978-4-86187-038-5	2007.10	市1
⑤ モビリティ・マネジメント入門―「人と社会」を中心に据えた新しい交通戦略 / 藤井聡・谷口綾子	学芸出版社 978-4-7615-2426-5	2008.3	市1 県川
クルマのない生活―フライブルクより愛をこめて― 今泉みね子	白水社 978-4-560-04079-9	2008.5	市2
「日本は先進国」のウソ 杉田聡	平凡社新書 978-4-582-85424-4	2008.6	市1
タクシーに未来はあるか <規制緩和と交通権 2> 戸崎肇	学文社 978-4-7620-1860-2	2008.6	市1 県立
道路をどうするか 五十嵐敬喜・小川明雄	岩波新書 新赤1164 978-4-00-431164-5	2008.12	市4 県立
脱・スピード社会―まちと生命を守るソフトカー戦略― 小栗幸夫	清文社 978-4-433-37379-5	2009.4	市1
⑪ 道路整備事業の大罪―道路は地方を救えない 服部圭郎	洋泉社新書y220 978-4-86248-436-9	2009.8	市3 県立
高速無料化が日本を壊す 上岡直見	コモンズ 978-4-86187-068-2	2010.2	市3
まちづくり			
快適都市空間をつくる 青木仁	中公新書1540 4-12-101540-1	2000.6	市5 県立
なぜ日本の街はちぐはぐなのか ―都市生活者のための都市再生論― / 青木仁	日本経済新聞社 4-532-14968-1	2002.4 ×	市2
日本型魅惑都市をつくる 青木仁	日本経済新聞社 4-532-35087-5	2004.3	市5
新しい自治体の設計 3 持続可能な地域社会のデザイン 生存とアメニティの公共空間 / 植田和弘 他	有斐閣 4-641-05362-6	2004.8	市1 県立
ファスト風土化する日本―郊外化とその病理― 三浦展	洋泉社新書y119 4-89691-847-9	2004.9	市3
岩波講座 都市の再生を考える 5 都市のアメニティエコロジー 植田和弘 他	岩波書店 4-00-010977-4	2005.2	市1 県立
大型店とまちづくり ―規制進むアメリカ、模索する日本― 矢作弘	岩波新書 新赤960 4-00-430960-3	2005.7	市6 県立

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×＝絶版	図書館 蔵書数
まちづくり つづき			
⑨ 脱ファスト風土宣言 商店街を救え! 三浦展 編著	洋泉社新書y152 4-86248-020-9	2006.4	市3
⑩ 日本型まちづくりへの転換―ミニ戸建て・細街路の復権― 青木仁	学芸出版社 978-4-7615-2408-1	2007.7	市2
フライブルクのまちづくり ソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン 村上敦	学芸出版社 978-4-7615-2419-7	2007.12	市1 県立
都市の魅力アップ 鳴海邦碩 編著	学芸出版社 978-4-7615-2425-8	2008.3	市1
② 「都市縮小」の時代 矢作弘	角川oneテーマ21 978-4-04-710218-7	2009.12	市3 県立
まちづくりのための交通戦略 ―パッケージ・アプローチのすすめ 改訂版 / 山中英生・小谷通泰・新田保次	学芸出版社 978-4-7615-3184-3	2010.2	市1 県川
ドイツの地域再生戦略 コミュニティ・マネジメント 室田昌子	学芸出版社 978-4-7615-2485-2	2010.6	市1 県立
地球環境・エネルギー問題			
環境税とは何か 石弘光	岩波新書 新赤600 4-00-430600-0	1999.2	市5 県2
石油の終焉―生活が変わる、社会が変わる、国際関係が変わる― / ポール・ロバーツ	光文社 4-334-96181-9	2005.5	市3 県立
空海とアインシュタイン 広瀬立成	PHP新書388 4-569-64782-0	2006.3	市4
「石油の呪縛」と人類 ソニア・シャール	集英社新書375 978-4-08-720375-2	2007.1	市2
地球白書2007-08 クリストファー・フレイヴン 編著	ワールドウォッチジャパン 978-4-948754-28-7	2007.11	市4 県川
環境首都コンテスト ハライフ研究所 編著	学芸出版社 978-4-7615-2453-1	2009.3	県立
地球温暖化 はますすべての質問に答えます! 明日香壽川	岩波ブックレット760 978-4-00-009460-3	2009.6	市5 県立
グリーン・ニューディールで始まるインフラ大転換 ―エネルギー、交通に、百年に一度の巨大マーケットが生まれる! / 井熊均	日刊工業新聞社 978-4-526-06302-2	2009.7	市1 県川
低炭素社会に向けた12の方策 藤野純一・榎原友樹・岩淵裕子	日刊工業新聞社 978-4-526-06331-2	2009.9	市2
低炭素経済への道 諸富徹・浅岡美恵	岩波新書 新赤1241 978-4-00-431241-3	2010.4	市4 県川
地球環境の事件簿 石弘之	岩波科学ライブラリー170 978-4-00-029570-3	2010.5	市2

図書館蔵書欄は、「市」は川崎市立図書館の蔵書数を、「県立」は神奈川県立図書館(紅葉ヶ丘)の所蔵を、「県川」は県立川崎図書館の所蔵を、「県2」は県立両館の所蔵を示します。(2010年8月末日現在) 県内の公立図書館には相互貸借制度があり、最寄りの図書館に依頼すると取り寄せて読むことができます。



本冊子は、管理された森林からの木材、間伐材、古紙再生材を合わせて100%となる森林認証を取得した用紙に、生分解しやすい植物原料インクで印刷して作りました。

(表紙:ECFパルプ100%、本文:再生紙70%以上+国内産間伐材10%以上)

■本会のご案内

◆人と環境にやさしい交通まちづくりで地域を変えたい方を募集中！

- 自転車活用担当 ●路線バス・コミュニティバス担当
- 生活道路担当（まち歩き、安全・安心・快適な歩行環境づくり）
- 広報担当（ホームページ、メールマガジン、twitterなど） ●事務局

などに、ボランティアでご参加いただける方を募集しています。本会会員は、情報交換のほか、日頃の活動に便利な名刺やメールアドレスの発行（正会員のみ）を受けられます。本会の取り組みに関心があり時々でも定例会にご参加いただける方はもちろん、普段メールでの連絡が中心でも、適宜報告のできる方なら歓迎です。

地域の交通環境を良くしたい、社会・地域活動に無理のない範囲で参加したい、一緒に地域交通の勉強をしたい…という方、お気軽にご参加ください。

◆寄付や会費（賛助会員）でご協力いただける方も募集中！

詳しくは本会ホームページにて → <http://sltc.jp/support>

地域交通出前講座シリーズ #4

交通・環境・まちづくり おすすめ図書2010

2010年 1月 30日 初版発行

2010年 9月 9日 2版（2010年度版）発行

編 者 持続可能な地域交通を考える会

発行者 井坂 洋士

© 2010 Sustainable Local Transit committee.

持続可能な地域交通を考える会
Sustainable Local Transit committee, Kawasaki Japan.



発行元 _____

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

〒211-0004 川崎市中中原区新丸子東3-1100-12

かわさき市民活動センター レターケース5号

[URL] <http://sltc.jp/> [twitter] @sltcjp

[E-mail] query@sltc.jp [FAX] 020-4664-6084